

2020年11月1日 聖餐式説教

本日は諸聖徒日です。現在の教会暦になってから、日曜日と教会の祝日が重なった場合、日曜日（主日）を優先する日が増えましたが、12月25日の降誕日、1月1日の主イエス命名の日、1月6日の顕現日、2月2日の被献日、8月6日の主イエス変容の日、そして今日11月1日の諸聖徒日は、主日に優先して祝日を記念することになっております。そのため本日は白を用いて諸聖徒日の礼拝を共にし、使徒書として選ばれておりますヨハネの黙示録から、神の国の到来と、この世の生涯を終えて神様の許に召された人々の御魂の光明と平安を祈る日となっています。また11月全体を諸魂月と呼び、墓参を行う習慣があります。

さて、ヨハネの黙示録を中心とするいわゆる黙示文学は、当時のユダヤ社会で大変好んで用いられた文学様式です。神の国や歴史の動きを比喻を用いて表す文学様式なため、一般的にわかりにくく、イメージしにくいと考えられることが多いようです。本日は、黙示文学の示すところから、来るべき神の国がどのように描かれているのか、垣間見てみたいと思います。

まず黙示文学の問いかけには、「なぜ正しく生きようとすればするほど、苦しい思いをしなければならぬのか」というのがあります。神様の御心に従って生きれば生きるほど、幸せに満たされるはずなのに、正しく生きようとすればするほど苦しい思いをせねばならない、ずる賢く生きる方が魅力的に見えたり、悪の力の前に正しいことが隅に追いやられてしまうことが常の世の中であるのはなぜなのか、という問いです。これは聖書の時代はもちろんのこと、現代社会でも同じではないでしょうか。

それに対して聖書の記者たちは答えます。正しく生きようとすればするほど苦しい思いをせねばならないのは、この世界が神様の御心が行われていないところだからだ、悪で満たされ、よいことがすっかり追いやられてしまっている世界なので、正しく生きることに苦難が付きまとう、しかし、神様は悪の世界をよしとしているわけではない、神様が悪に負けているわけでもない、この暗黒の世界を神様は今じっと忍耐をして見守っているのだ、時がくれば必ず神様は悪を滅ぼされ、御心がすべて行われる世界を到来させる。その訪れは必ず来る。だから私たちは悪の世界に負けず、苦難を背負いつつも神様の御心を行い続けようではないか、最後までこの歩みを続けていこうではないか・・・、黙

示文学が語っているのはこういうことだったのです。

この、悪の世界が滅ぼされ、神様の御心がすべて行われる日の訪れを、清書の中では終末と呼んでいます。終末というと恐ろしいイメージを持たれる方が少なくないのですが、悪の世界が終わり、正しい世界が到来するのを終末を読んでいるわけですので、恐ろしい日ではなく、待ち望む喜びの日が終末ということになります。

当時、多くの迫害が権力者によって行われました。キリスト教を信じるのはまさに命がけ、今日は共にいても明日は命を失っている人が毎日のようになっていると言っても過言ではない日々でした。そうした中で、人々は神様の御心が完全に行われる日を待ち望み、たとえ自分の命が失われようとも、忍耐をもって迫害の時を過ごしたのです。その結果キリスト教は250年にも及んだ迫害の時代を経ても消え去ることなく、ローマの国教となり、世界宗教へと歩んでいくことになりました。しかしその歩みは、多くの人々の命と忍耐の上に成り立っているのです。また日本は世界屈指の迫害国であり、豊臣秀吉の26聖人殉教から明治維新のキリスト教禁令高札撤去までは約270年、1世紀から4世紀まで続いた初代教会の迫害より日本の迫害の方が長いことも忘れてはなりません。また戦時中のキリスト教迫害も大きな困難をもたらせました。

諸聖徒日は、神様の国到来を待ち望みつつ、命を失った人、耐え忍んだ人々のことを覚えると共に、信仰の先輩たちの魂の光明と平安を祈り、そのよい模範に私たちも従っていく思いを新たにするときです。本年は新型コロナウイルス感染防止のため、逝去者全員のお名前をお読みせず、記念することになりますが、私たちの信仰生活が先輩たちの歩みの上に成り立っているのを再認識しつつ、自らの歩みを新たにしていける日です。

今年はちょうどこの日が日曜日となりました。神様はこの世界が御心がすべて行われるところになるよう心から望んでおられ、宣教の務めを私たちに与えられました。私たちは自らの生き方すべてを通して、この務めを果たし続けていくのです。新型コロナウイルスの収束が1日も早く成し遂げられますよう、私たちの礼拝が1日も早く通常に戻れますよう願いつつ、多くの困難を耐え忍んだ信仰の先輩たちを覚え、私たちの目前にある困難に取り組んでいきたいものです。愛は困難を克服する大きな力、この事実を実感する11月を共に過ごしてまいりましょう。